

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：12606

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06786

研究課題名(和文) イタリア「アカデミー」のオペラ文化への貢献：モンテヴェルディとの関わりを中心に

研究課題名(英文) The contribution of the Italian "academies" to opera: the period of C. Monteverdi

研究代表者

萩原 里香 (Hagihara, Rika)

東京藝術大学・音楽学部・助手

研究者番号：70783398

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、17世紀イタリア中北部で活動していた貴族の集まり「アカデミー」の音楽文化への貢献を明らかにすることを目的とした。当時の最重要オペラ作曲家であるモンテヴェルディの創作時期から対象年代を設定し、そして研究対象とするアカデミーを選定した。成果としては、ローマの貴族で作曲家のカヴァリエーリのフィレンツェでのアカデミー活動、次にマントヴァを拠点とするアカデミーにおけるユダヤ人芸術家たちの活動についての研究、また専用劇場を持つアカデミーも存在したことから、初期の劇場事情についてヴェネツィアを対象とした調査などを行なった。個々のアカデミーに関する考察を基に、相互関係についてもまとめつつある。

研究成果の概要(英文)：This study's purpose is observing the contribution to opera of the Italian "academies" organized by noblemen in the Seventeenth century in northern Italy. I started my research by setting the target years: the period of Claudio Monteverdi's activity, and the target academies. As the fruits, I researched the activity of Emilio de' Cavalieri, roman nobleman, in the Florence academy, next, I researched the activity of the Jewish artists in Mantuan academy. Then I examined the early context of theatres in Venice because there were the academies that had a private theatre. In addition, I organized the symposium in commemoration of the 450th anniversary of Monteverdi's birth.

研究分野：イタリア・オペラ

キーワード：アカデミー アッカデーミア モンテヴェルディ 17世紀 北イタリア

### 1. 研究開始当初の背景

北イタリアの宮廷で催される祝祭で催されていた華やか舞台芸術を萌芽とし、音楽と演劇がひとつになり誕生したのが、後に「オペラ」と呼ばれるジャンルである。オペラが誕生したとされるのは1600年であるが、それは、楽譜が現存する最も古いオペラ作品《エウリディーチェ》(リヌッチーニ台本/ペーリ作曲)が、この年にフィレンツェで上演されたためである。そのときに上演に携わった芸術家たちは、宮廷内での役割とは別に、私的な集まりを持っていた。その集まりで議論の的になっていたのが、古代ギリシア悲劇にならって音楽を用いて演劇を上演することであった。彼らの集まりは「カメラータ」と称されるが、当時、知識人や芸術家たちによるこのような集まりは、一般的に「アカデミー」(イタリア語: アッカデーミア)と呼ばれた。

「アカデミー」は、15世紀後半ごろより、イタリアの各都市にみられた、貴族を中心とする知識人たちの集まりであり、その都市の文化の充実に少なからず貢献した。彼らの関心には、絵画や古代の著作、雄弁術、演劇、そして音楽などが含まれていた。

演劇や音楽に関心を持っていた「アカデミー」には、舞台上演における全体のコーディネイトを担う「コラーゴ」という役割があったこと、そして、それを担う人物のなかで宮廷の祝典で催されるスペクタクルの企画・制作を請け負っていた人物がいたことを、研究代表者は2015年提出の博士論文にて明らかにした。例えば、マントヴァでは「アッカデーミア・デッリ・インヴァギーティ(好事家たちのアカデミー)」の(その身分から公式ではなかったが)メンバーであった、ユダヤ人で劇作家のレオーネ・デ・ソンミ(c.1527-c.1592)が、ゴンザーガ家の祝典で、コラーゴを担う立場にあった。また、フェッラーラでは、「アッカデーミア・デッリ・イントレーピディ(剛勇者たちのアカデミー)」の中心人物であった、エンツォ・ベンティヴォリオリオ(c.1575-1639)が、パルマなど諸都市にコラーゴとして招聘されていた。

博士論文では、コラーゴ単体に焦点を当て、その役割と存在意義を考察したが、当時コラーゴのノウハウがどのように他都市へと伝わり、そしてどのように後世へ影響を与えたかという点の解明が課題として見えた。というのも、コラーゴの役割をまとめた1630年頃に著された不明著者による論考(下記)は、同じ立場にあった人たちのために書かれたと考えられるが、出版されていなかったのである。

*Il Corago o vero alcune osservazioni per metter bene in scena le composizioni drammatiche* [コラーゴ: よき舞台を作るための考察](不明著者、1630年頃)

### 2. 研究の目的

コラーゴの仕事のマニュアル本のような論考の存在が確認できるものの出版された事実がなかったため、コラーゴが活動した「アカデミー」の情報の流通経路としての役割、それによる都市間のネットワークに注目するに至った。このような経緯によって本研究は、17世紀イタリア中北部で活動していた「アカデミー」を対象に、その相互ネットワークのあり方を通し、音楽文化への貢献、とりわけオペラの誕生と発展における貢献を考察することを目的とした。

### 3. 研究の方法

以下のように計画を立て、都度口頭発表や論文投稿を行なった。

先行研究を精査し研究の基礎固めを行なう。

詩、演劇、音楽に関心を持っていた、各都市の「アカデミー」を抽出し、とくにクラウディオ・モンテヴェルディ(1567-1643)の時代に大きな影響をもっていた「アカデミー」を考察対象に選定する。

考察対象とした「アカデミー」の活動の詳細、在籍メンバーとその専門領域、そして出版物を調査し、その普及状況も検証する。

詩(台本)や楽譜、演劇、音楽劇の実践状況の調査。他都市での再演状況も調査する。

現地に於て資料収集と「アカデミー」の活動場所(定期的な集会場所、及び上演場所)を調査する。

### 4. 研究成果

(1) 対象時期として設定していた、モンテヴェルディのオペラの創作時期、1607年から1643年の間に活動実績のあったイタリア中北部の都市を拠点とするアカデミーを調査するために、その対象とするアカデミーの選定を行なった。まず、プリティッシュ・ライブラリーのデータベースで確認できる857のアカデミーから229を抽出した。さらに、この229のアカデミーの活動内容を精査し、音楽や演劇など、舞台芸術に関わる活動を行っていたものを抽出し、34のアカデミーを選定した。

(2) オペラ史において、オペラと関わりのある貴族の集まりとしては、既に述べたフィレンツェの「カメラータ」が最も知られている。「同志たち」を意味するサークル名であるが、性格的にはアカデミーの活動と考えられる。作曲家のヤコポ・ペーリ(1561-1633)やジュリオ・カッチーニ(c.1550-1618)、台本作家のオッターヴィオ・リヌッチーニ(1562-1621)などがそのメンバーとして知られている(「研究開始当初の背景」でも述べた《エウリディーチェ》の創作と上演に関与)が、彼らとともに、フィレンツェのメディチ家で芸術活動を行っていた人物に、エミーリオ・デ・カヴァリエーリ(c.1550-1602)

がいた。初期のアカデミーとして重要なこの集まりの活動を通して、カヴァリエーリの役割について考察した。彼は1589年に宮廷内で催された祝典で上演される舞台作品の上演責任者（本研究のきっかけである、コラゴに相当）に任命されていた。彼の活動や君主からの評価（文書）を考察した結果、作曲家である人物が舞台上演全体の責任者を務めた（それ以前はいち音楽家が責任者を担うことがなかった）ことにより、舞台芸術における音楽の地位が向上したと考えられた。よってカヴァリエーリは、音楽劇という総合芸術が誕生するための土壌を支えた人物であったと言える。すなわち、「音楽劇」というジャンルの創始に対する彼の貢献は大きいという結論に至った。

以上については、論文(3)において成果を発表した。

(3) 2017年1月下旬より2月中旬にかけて、マントヴァの国立古文書館にて史料調査を行なった。マントヴァは、1590年頃から1612年までモンテヴェルディが宮廷の音楽家として仕えていた都市である。この地で16世紀半ばに発足し、17世紀初頭にオペラの制作と上演に大いに関わっていたのが「アカデミア・デッリ・インヴァギーティ」である。そのメンバーであった貴族たちとともに活動を行っていたユダヤ人がいたこと、そしてその人物も関わるユダヤ人演劇カンパニーがマントヴァの宮廷で活動していたことに着目した。貴族の集まりであるアカデミーは、当然宮廷とのつながりを持ち、各種イベントごとでも君主と大きく関わっていたが、このユダヤ人演劇カンパニーは、それ以前から君主のために音楽を用いた舞台芸術を実践しており、宮廷文化の発展に大きく貢献していたと言える。このカンパニーで中心的な存在だったのがレオーネ・デ・ソンミであるが、彼はオペラ研究よりも演劇研究の分野でよく知られる人物である。宮廷に出入りするユダヤ人は、作曲家や楽器奏者、歌手など多岐にわたるが、モンテヴェルディの活動時期において最も注目できたのは「踊り手」であった。16世紀末頃は、全ヨーロッパでユダヤ人を隔離する措置がとられており、そのためマントヴァの宮廷で働くユダヤ人芸術家のなかにも、改宗するものが数多くいた。故にユダヤ人の宮廷内での貢献は見過ごされがちであった。しかし、モンテヴェルディの書簡にも登場し、宮廷楽長になった後の彼と大いに関わっていた「踊りのマエストロ」、ジョバンニ・バッティスタ・レナート（17世紀初頭に活動）もまた、改宗した元ユダヤ教徒であった。ユダヤの文化が、この大作曲家と、とりわけ踊りの分野で関わりを持っていたという興味深い事実が浮かび上がった。

以上については、学会発表(2)において成果を報告した。貴族サークルであるアカデミー内で一人のユダヤ人が活躍していたという

事実から宮廷内での芸術活動を掘り下げた結果、モンテヴェルディと関わっていた宮廷の踊り手が改宗したユダヤ人であったことが明らかになった。この成果についてモンテヴェルディの作曲した踊りのための作品を研究するイタリア人研究者からも関心が寄せられた。なお、論文としても成果報告をする準備を進めている。

(4) 研究対象として抽出したアカデミーのなかには、メンバーたちが制作した舞台作品を上演するための専用劇場を所有するものもあった。ヴィツェンツァの「アカデミア・オリンピカ」や、上述したフェッラーラの「アカデミア・デッリ・イントレーピディ」などである。アカデミーと劇場については、当研究開始以前よりヴェネツィアの初期の公開劇場に関する調査を行ないつつあったため、改めてその成果を発表すべく補足調査を行なった。ヴェネツィアを対象としたのは、オペラのための初の公開劇場が作られ（1637年）、ヨーロッパ中に影響を及ぼすほどオペラ文化を発展させた都市（国家）だからである。なお、本調査は同関心のあった音楽史の今谷和徳氏と共同で行なわれた。

以上については、その他講演(1)、及び論文(2)において成果を発表した。

(5) 2017年は、本研究において重要な作曲家である、モンテヴェルディの生誕450年の記念年であった。そのため、いくつかの講演を行なう機会を得、当研究と絡めた発表を行なうことができた。そのひとつとして、早稲田大学オペラ/音楽劇研究所で、研究代表者の参加する「バロック・オペラ」ワーキンググループにおいて、これを記念するシンポジウム「モンテヴェルディから広がるバロック・オペラの世界」を企画した。立案者として運営面の裏方作業はもちろん、自身の研究発表も行なった。

彼の最後のオペラ《ポッペアの戴冠》（1643）は、それ以前までギリシア神話がオペラの題材であることが当然であったなか、世俗オペラとして初めて歴史が扱われたオペラ、すなわち実在した人物を登場させた初のオペラであった。取り上げられたのは、古代ローマ帝国の第5代皇帝ネロ（ネローネ）とその愛人のポッペア（ポッペア）である。この台本を書いたフランチェスコ・ブゼネッロ（1598-1659）は、ヴェネツィアのアカデミー「アカデミア・デッリ・インコーニティ（知られざる者たちのアカデミー）」のメンバーであり、この集まりの思想も作品に影響していると考えられた。その点をアカデミーのネットワークと関連させることを視野に入れつつ、このオペラの題材に着目し、同様の歴史的題材によってヨーロッパ中でオペラが作られるようになる様を、18世紀までの作品を対象に、上演データを収集することで考察した。その結果、歴代の古代

ローマ皇帝のなかで、最もオペラの題材となった皇帝は、最初の歴史的題材のオペラである《ポッペアの戴冠》で扱われたネロ帝であったことが明らかになった。

以上は学会発表(1)に該当し、また研究ノートとしても採択されている(論文(1)に該当)。

研究期間内には個別のアカデミーに関する研究成果を、学会や論文を通して発表してきたが、全体をまとめた成果報告も今後行う予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

(1) 萩原 里香、古代ローマ皇帝を題材としたオペラ：モンテヴェルディからの系譜(研究ノート)、早稲田大学オペラ/音楽劇研究所『早稲田オペラ/音楽劇研究』創刊号、査読有、2018、印刷中

(2) 今谷 和徳、萩原 里香、17世紀ヴェネツィアのオペラ劇場の変遷とその位置(研究ノート)、早稲田大学イタリア研究所『研究紀要』7号、査読有、2018、53-75

(3) 萩原 里香、「作曲家」エミーリオ・デ・カヴァリエーリ再考、早稲田大学総合研究機構『プロジェクト研究』12号、査読有、2017、1-13

<https://www.waseda.jp/inst/cro/assets/uploads/2017/04/fb6f466c954dfb18b6f8bf99be34a84b.pdf>

〔学会発表〕(計2件)

(1) 萩原 里香、古代ローマ皇帝を題材としたオペラ：イタリア・オペラを対象として、モンテヴェルディ生誕450年記念シンポジウム「モンテヴェルディのオペラから広がるバロック・オペラの世界」、早稲田大学オペラ/音楽劇研究所主催、2017年12月9日

[https://researchmap.jp/?action=cv\\_download\\_main&upload\\_id=149909](https://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=149909)

(2) Rika HAGIHARA, *The contributions of the Jewish community to the improvement of theatrical art: until the period of Monteverdi in Mantua*, The 20th Congress of the International Musicological Society (IMS)、2017/3/23、Tokyo University of the arts (Tokyo)

〔図書〕(計1件)

(1) 萩原 里香 他、キーワードで読む オペラ/音楽劇 研究ハンドブック、丸本隆他編、アルテスパブリッシング、2017、464(48-52)

〔その他〕

講演(計2件)

(1) 萩原 里香、モンテヴェルディ《ポッペア

の戴冠》：ヴェネツィアにおけるオペラ劇場事情と併せて、日本イタリア古楽協会 2017年第2回例会、依頼有、2017年8月25日

(2) 萩原 里香、モンテヴェルディ：ヴェネツィアの芸術文化の発展から《ウリッセの帰郷》まで、日本イタリア古楽協会 2016年第2回例会、依頼有、2016年9月9日

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

萩原 里香 (HAGIHARA, Rika)

東京藝術大学・音楽学部・助手

研究者番号：70783398